九冊合
～13
2790

へ13
2790

へ13
2790
特

表
1961
111
ヲ改メ

訪諏湖狐怪談後編序

去春出版の時備祥ひよ行れて世様
なる沢偏と世間稗きだしてひもと
備むしいてこの原本稿の名毛おそれ
なの後ろ号の遠ちもなめるへし
栄色栄まの祝るを悦をこのあるのこるを
原源あ心ひをを宮ふ

文化八辰春、亀戸偶居にして
十返舎一九誌

冊

訪諏湖狐怪談後編序

去春中諏訪の時笹屋祥のよ行れて其様
子沢偏と書冊を国稗きだして此もと
編むしてもの原本行方の名毛おそれ
なの後ろ多のの遠移ることも多くあるべし
筆乱雲ものの祈るで慎をしのあるのこるを
ゆるしたまへ　亀戸偶居しるす

文化八辰春　十返舎一九誌

さて八幡
おろかなこと
あるもん
よくうり
ろれいぎや
大ぼうけんと
おりんぐも
ろうろう今
るく出いの
あしんと
おてーさの
よっこう
らいとるや
まーける
ちょうか大
ぐきこれ
ろうろうよ
しびくと
のせ日ったい
ぐれがいそ
ぎあるめど
ろうくらる間
おろかなこと
ゆてちょうか
るうろうとと

おろかなこと
ちょうかるのうく
ちょうかるちょうか
らうろうてあく
ものゆて大きよ
おろうろきこうろ
ろうらうろうん出る
ろうらうろうん出る
ろうろうるあしゆて
おろうろうるあしゆて
ろうろいちうろーし
ろうるまちゆろー
ろうろうおろがゆ
ろうろうろうろー
るあるとーの
つこやるぎろう
などをつけるる
てのおろうろ
そのうちあきん
まるあるべー
るうろうをろうろ
ひまーと
そのあーをあろ
ろうけれる

諏訪の湖狐怪談前編

中

十返舎一九作
勝川春亭画

付

「おのれ
へさらば
まいぞ
「おのれ
あわよ
まあいや
まぶとい
ゆろの

雞谷
三藏
橋
野玉屋

みゆ〜あふ大さのちんまちへちよこんのりことむ雪れぐと
まるもろふこそ〜ふ〜ふそうぐんーてせや〜おづをちんまちく
つろり〜いぐ〜きやのきんざんとりるさ〜じひゆ〜ぐんの
ぜんせんぐひきふゆ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふを山の井とおく〜ことめるりへ
りことむさゆ〜ふ公をつけさせふこそ〜へちんまちのくさよ
ちゆ〜じとろふ
こころふをに
のさまるを
ためちゆ〜
ちちのちろんを
ちーてくじろる

「ちとこようやま
きさのでん
さるぐ
りるまきを
とへる

「とぐ〜の山人
さんぐかて
きそそれろる
〜ちゆじの
ひざろげ〜ちゆ〜
りよなへぞのちるまー
こちでだけさ世の
ひざろげへとん
おかりろるへるみ

西行法師諸国物語 前編 下

十返舎一九作
歌川豊国画

「いまだいさんだらぐ
さてもきごとぞ
きうくうせあがれ
十三
「とれいさんきるまさんせ
ことはをうつしてとこと
ある年ごと山の井をのひ
こめおのれ世ごうのごく
ゐるまひるゆぞ山の井
あまりのてふてく
くてこうろん
ごひまつのゆごちて
あくそひるをふて
きてゐをゆごもろをを
ろんてごくゆてあごくく
のくちくふいひあせ
てこさくろけんしたことまで
ひつくせーもひごーうゆくべ
しおりてむきてれこいこあご
つきこと山の井をてこちゆ
いよくきんごゆをころせ
さいゆくせうけきんぐふ山の
井をのしてろるゆく
いよくいろて
あくそのて
ぶくく
「おまいあまりくちぐ
まきてごやさういくくるまんせ
ゆんじやあろふとふこくさんやろる
ぐらふこふろふうんせうる
十四

春亭画

辰春

諏訪の湖狐怪談後編 上

十返舍一九作

勝川春亭画

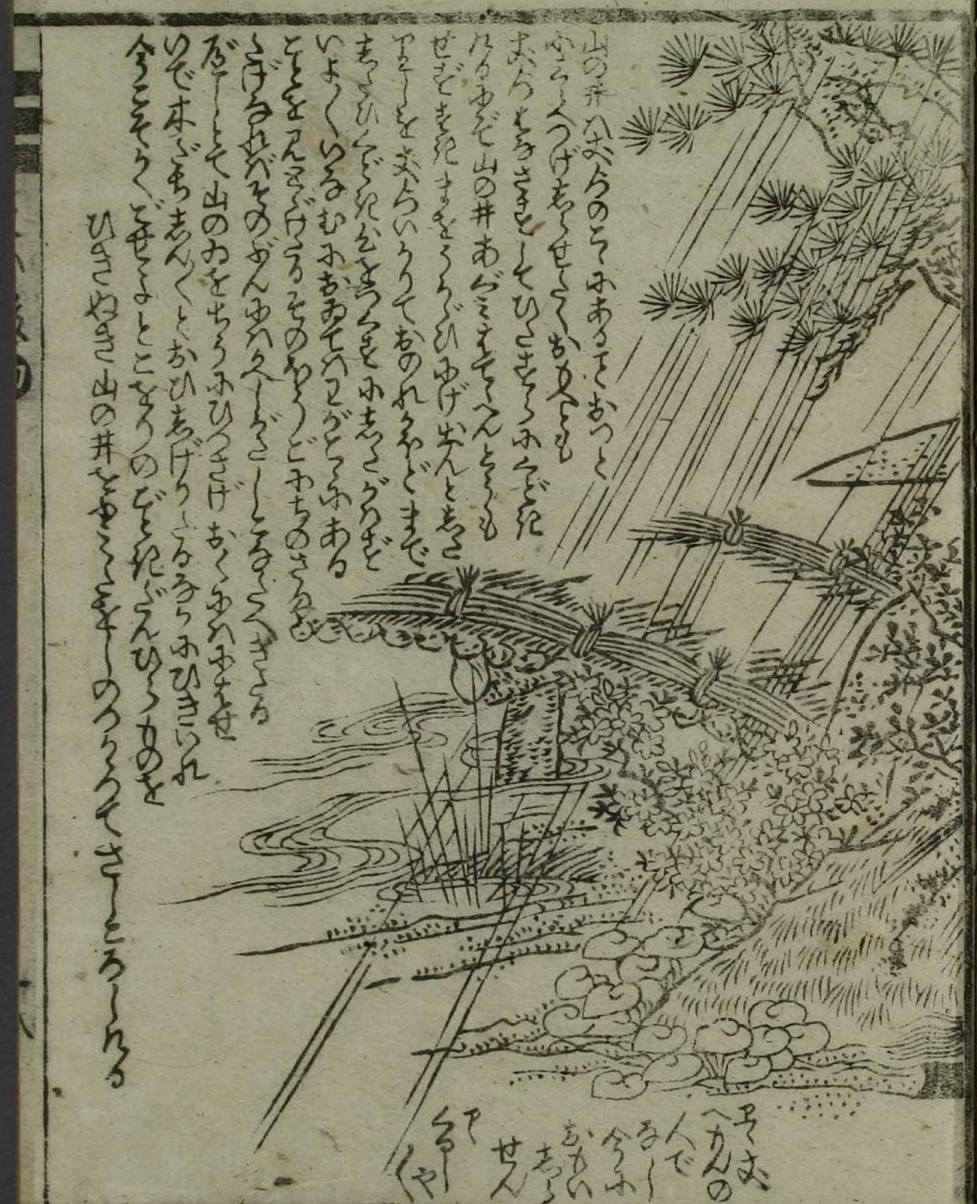
山形夫左ヱ門
引舟山の井

山の井はゆうくあろ
そのんをゆゞめて
それよりゝぞうじ
まの侍を更
中きえらゞ
来り給るこれ
までいろくと
かの一つのでふ
さゐぐのことを
そひろけとり
ゆさしふ侍を
夫がとゞのそ
ゆとゆうゑ
きをのこあろ
ゆへ十ゞ九り
よらゞゆうろ
のものとおりひつめうるを
るればこのえ
いうゆうの
こをありともうこれ
のおつぷをとじる
べーとおりひつめそ
山のかぞうおゆの
中きふ来ろる

さて又山ごもの丈ろうはごうじやのくるしきふつとあるる山ごもの伴右丈とはごうけゆてまさしくれべたるぐこゞゆまくて此ゐどよう伴右まくこふまのびいろうるぐたうまぐも山の井とのゆきふまるまのうげとうくうくひるふせんねんをうけるまとはの医師田川さちくうむまめおべんろうるゆへ大きふおどろくやぐそそのこと伴右丈ふおのくろうるれべ伴右丈

ハふこうくふいこん
あるゆへ山の井
とこゞめおきて
丈へうんのかふまるこゞんせんと
むこうるゆへ丈ろうふおぐんのこふ
まるこことをいぶうくくおりひ伴右まのたるく
ふふこうくとくふものくゞうるうちときく
さてへたるおりふこうくはれをうこゞくゆうひ丈さう
ふまるつけ祢らふふまぎれるくおのれろうもち少くく
られんとむふおりひるくく山のかをむうふひとまふひきのれ
むどゞれるゆそ山の井丈へうんとえるようおどろきさそてそ
はれくゞまこいつまうふちゞんをしむひやけふおりてゞも丈ろうおとゞうくふ
たるさゞ伴右ゞとのてたゆくおつくもくせくくろとゞ
もゞゞれくろくるる

こひのうらこ
おかへさら
ごまろて
ろと
なれ



山の井ハおくらのてゐあるとおつと
ふるくつげちくせくちもくも
おくらとちさきとしてひさきくふ
ひるゆゑ山の井あがさきそくへんとくも
せどもたまをくらびゆげ出んとちさ
アそくを丈らいうてあのれゆゑまで
まくひゐでたをまくらをゐまくゐもと
いよくいるむゐあそへことゐてふある
ことをんさげうそのやうどゐちのさる
ふげゐれをのゐんゆへくゐさくしてゐ
ゐくくして山のゐをちうふひくさけ おくゐ
ひで本ゐちまんくとおひあげうくゐるゐ
今ことそうくゐをくとをうのゐたれゐ
ひきぬき山の井をゆくくをくのうくてさくとうくる

さてまた山ごぼうを丸ごとぢうやを
つくるあるぢうまんまちふハひとう
そのうへけいせいきん山をとりけぢ
せーハこのくにはまあてのきんをとり
ゆくこのてあーれるまあや
のうくふめりよぐれうるく
うちゑ合のうくいきいをあー
ぐあぎんこまるおでんぐあふ
の赤きのくーちくぐあーれ
ふるがぐハぐきんこうの
あぐーるるゆくれよ
めんせーれおりた
ゆこがめのさてもおく
ゆーるおくーて赤ゐりく
きーかぐきめんとめこゆそ
めうゆちうう三月のあぐふ
ぞうあちよのきるみひきた
らふべーしとげんぢうおりこさ
されぐうちうぎいぢん
つしこあちそあつきー
まりうこきぐきよう
ゆそ伊ちまおりあい
もうーぎ大きふ

「そのきん山
ぐーんこ
ちあげ
みされ

「きぐんこのあんをもつてまんまち
ちまをとりけこーうこひあとるーて
ぐぢるーうるをおひさじくうひこと
さんぐーうるんこーゆしちんるどを
ちやづけのぎいとーてちーやのさのーー
そのひしひぐこちりれーー
ちーーーゆるーいこーぐ
ぐさーう

「ちぐいのさーぐきんゆー
きぐーうせのてーーーち
のきこ大正のきーうくハ
ちいーくーてんこーうのゆーうふまれ
ちーぢまめぢややをそーうぐゆーい
るーやーうさぐはハあこーるの手るの外ふ
つるぎさをてーうりせの大ざけい大江のむぎ
ゆーふ二月ちいのちーうををーーちぐのいちまれこーる

そのかーのむぎよ

「イヤわめく
いちぐんもるい
まーふ
いーうぢ
のるい
ちぐ
ぐきぐ
ぢ

ちぐーうれいうゆーも
いひこけるくをぐくーと
ゆーうけゆーあさい
ちーよぐーぐーぐーうーう
ぐけそのようるおを
るーーうりる

「そーて
ぐーまぐ
いちぐもぐん
けいゆうれ
ちぐーぐーる

二十八

火の用ふ
「ア気だ〜〜あさ〜〜
モシ〜〜

走

伽婢子 怪談 後編 下

きん山にあがるハぬ人
まるびきてあわぐ
よろ仕るまうさ
ゐそりてこのごと
かしこあられて
あらりがに仕る
ものしびらふ
ものくへうつさま
いひつけられかるらきん山をも
めしうれんとめてくるらゆくきん山
これをとうるーこそやどてひけを
うるぐひ吏田せざれこあってろ
とこのびぶ山の井がとあされー
ものをもふこそうるく

つぎのうら
うんとしこえも
ものふおちて
ゆく

○廻船往来

鴻巣氏